



# 地域一体となって 取り組む図書館運営

置戸から始まった北見地域の図書館

置戸町は、図書館がまちづくりに大きな役割を果たしてきたまちといえます。置戸町の図書館は、貸出方式の変更や貸出冊数制限の撤廃、自動車図書館の導入など、住民が利用しやすい図書館サービスを実践し、1970年代には住民1人当たりの貸出冊数全国一に輝くなど、全国的にも注目されたまちです。また、特産品である「オケクラフト」誕生を側面から支え、現在のビジネス支援サービスの原型となったといわれています。

こうした置戸町の図書館活動は近隣市町村へも波及し、オホーツク地域は図書館機能が充実した地域になっています。また、北見地域では「北見地域図書館ネットワークシステム研究会」が設置され、20年にわたる地道な研究活動が続いています。

置戸町に新しくオープンした置戸町生涯学習情報センターと、北見地域図書館ネットワークシステム研究会の事務局がある北見市立中央図書館でお話を聞きました。

## 住民の視点に立った置戸方式の図書館運営

'05年にオープンした「置戸町生涯学習情報センター」は、まちの中心部にあります。入り口には、図書館では珍しい無料のコーヒーサービス。薪ストーブと椅子がある交流スペースの奥には、約60,000冊の本が並び、車いすでも手の届く書架など、さまざまな配慮がなされています。

置戸町の図書館の歴史は、戦後間もない'48年にさかのぼります。「本だけあれば、金もかからず、施設もいらない」と青年読者会が発足し、持ち寄った本を回し読みしたり、町の有志に本を寄贈してもらい、貸出活動を始めました。青年読書会では、翌年開館した置戸公民館にそれらの本を寄贈し、公民館図書室が設置されます。

青年読書会は、'50年に図書館法が公布されたことや、まちが司書補の有資格者を迎え入れたこともあって、図書室を図書館にする運動を開始。わずか3年後



北見地域  
Kitami chiiki



置戸町生涯学習情報センターはオケクラフトセンター森林工芸館のすぐそば



飲食フリーな上、入り口にはコーヒーマシンも。住民意見を反映した結果



薪ストーブのある交流スペースの奥に広々とした書架スペースがある

に置戸町立図書館条例が制定されます。これにより専門職員の配置や図書館協議会の設置など、図書館法の理念をくみ取りながら、図書館運営が始まっています。

置戸町の図書館活動が大きく発展したきっかけは、'64年に文部省の農村モデル図書館に指定されたことです。'65年に図書館が新築され、「奉仕範囲を全町民に」「町民の生産活動および日常生活に役立つ読書活動の展開」「児童図書館的機能の展開」「郷土博物館的機能の具備」を活動の方針に据えました。

こうして眺めてみると、今まさに図書館に求められている機能が包括されています。'80年代当初でも全国



自動車図書館「やまびこ号」は現在5代目

の町村図書館設置率が約10%という状況の中、図書館への理解や利用拡大は、大きな目標だったといえるでしょう。そこで、大活躍したのが自動車図書館「やまびこ号」です。当時はまだ運転免許を取得している人はわずかな時代でしたが、町内の会合や健康相談などに出かけ、本を手にとってもらえる機会を創出。町内全域を回り、自宅まで本を運ぶサービスも行うようになりました。

また、貸出方式をプライバシーの点からニューアーク方式<sup>※1</sup>から逆ブラウンチケット方式<sup>※2</sup>に変更。返本箱を設置し、町内どこでも返却できるように工夫し、貸出制限数の撤廃、貸出期間の延長、予約サービスの開始など、利用者の立場に立った運営を心がけ、こうした取り組みは置戸方式と呼ばれるようになりました。

当時の貸出はコンピューター管理などされていませんから、利用者の便宜を図りながら、蔵書の管理や返却本の整理を効率的に行っていくことは大変な苦労があったでしょう。しかし、常に利用者に向き合いながら運営していたことが感じられ、今改めて学ぶべき点のように思います。

### 住民が支える図書館運営

より多くの人が図書館を利用するために重要な要素が資料の充実です。しかし、限られた予算の中で資料費を確保する苦労は、昔も今も変わりません。



建設費の寄付者が掲載されている看板

置戸町では、早くから献本運動や冠婚葬祭のお返しを図書館に寄付するという動きが展開されてきました。'69年に町内で出火した工場が町民へのおわびとして100万円を寄付、全額図書費

#### ※1 ニューアーク方式

カードを使った貸出方式で、貸出履歴がカードに残る方式。本を借りた人の名前が残るため、プライバシーの観点などから現在ではほとんど採用されていない。

#### ※2 逆ブラウンチケット方式

あらかじめ図書貸出登録を行い、登録番号を記載した使い捨ての貸出券を利用した貸出方式。当時、置戸町の澤田正春司書が貸出方式を検討し、導入した。



に充てられました。また、町の臨時収入も図書費に充てられるなど、資料を充実させる上で、寄付金が貴重な財源になった歴史があります。図書の充実は利用拡大につながり、'76年には住民1人当たりの貸出冊数全国一となり、全国的に注目を浴びていきます。

また、こうした寄付活動は予算増額へ弾みを付けたほか、'84年には図書整備基金を立ち上げるなど大きな力になっていきました。現在もこの基金は運営されており、新館オープンに向けて'99年には図書館建設基金も発足。置戸町生涯学習情報センターの入り口には、基金に寄付を寄せた人たちの名前が掲示されています。

こうした寄付金活動は、住民が支える図書館運動の原点といえるでしょう。北海道には会費制の結婚式など独自の慣習がありますが、置戸町には住民が図書館を育てる伝統が息づいているのです。

### 図書館が支えた「オケクラフト」の誕生

置戸町の社会教育では、生産教育の推進に着目した活動がなされてきました。地場産業である林業に着目し、'80年代には研究集会が開催されるようになり、図書館前の遊園地には木製遊具も設置。公民館では毎月18日を「木に親しむ日」として、住民が手づくりおもちゃを製作する活動が始まります。

一方、図書館は、地域が必要とする資料をしっかりと収集し、情報の過疎地にはならないという姿勢のもと、木工をはじめ、さまざまな関連情報を先取りして収集するように努めています。図書館には「木と暮らし」コーナーが設置され、素早く本が探せる工夫もこらしました。その後、工業デザイナーで東北大学教授の秋岡芳夫氏との出会いによって、木工芸品製造に向けた取り組みが始まり、「オケクラフト」が誕生します。

近年、図書館サービスで注目されているものにビジネス支援がありますが、その原型は置戸町にあるといわ

れています。技術やデザインに関する本の収集はもちろん、講演会や人的交流など、図書館が果たした役割は大きなものがあります。「当たり前のことをきちんとやる」、これが昔も今も置戸に引き継がれる精神なのです。

### 新館オープンへの道のり

その後、老朽化が目立ち始めたことで、置戸町図書館の新館建設準備が始まります。住民に図書館活動が浸透している置戸町では、連続講座や町民アンケートなどを実施、先進的な他の図書館の視察も行いながら、町民の意見や要望を最大限に取り入れる努力をしました。

新しい図書館づくりの基本計画で掲げられたのは「本のある“みんなのひろば”としての図書館」です。本と出会う喜びや楽しさを実感できることや役立つ図書館であることはもちろん、誰もが気軽に訪れることができる「ひろば」を目指して、住民とともに成長する図書館を目指していこうというものです。

入り口そばにはのんびりとくつろげる交流スペースや無料のコーヒーサービス、飲食物の持ち込みも許可しています。図書館は静かなところという一般的なイメージがありますが、ここでは時折、走り回る子どもたちもいます。「全体の静寂を確保するのではなく、静寂の空間を確保したのです」と館長の前田幸治さん。パソコンを持ち込めば、無線LANカードで自由にインターネットを利用することもできます。また、まちの個性を反映して、町内在住のクラフトマンと建築家と職員が共同で家具の一部も製作。日本図書館協会建築賞を受賞するなど、ハード面での評価も高い施設です。

新館の正式名称は「置戸町生涯学習情報センター」となっており、図書館の文字がありません。総務省の過疎債を活用したことで、図書館という文字が使えないのです。図書館の建設補助金が廃止された中での苦肉

の策でした。現在、過疎債のメニューには図書館建設がないため、図書館界では国へも働きかけているところですが、図書館のない町村にとっては大きな壁といえるでしょう。置戸町では'53年に施行された図書館条例を廃止しており、図書館界でも賛否両論が分かれた議論でもありますが、実態的に図書館機能が継続されているわけですから、地域の知恵として評価できると思います。

施設が新しくなったことで、置戸町の図書館では町外の利用者が増えているといいます。「今後はシニア対策が課題。デイサービスとのタイアップは始めていますが、老人クラブなど高齢者が集まる場所への出前図書館なども検討していきたい」と前田館長。時代や環境の変化を踏まえて、一つひとつ課題を解決していく姿勢は今も引き継がれています。

### 近隣地域へ波及する図書館活動

置戸町の図書館活動は、近隣市町村に大きな影響を与えています。道内市町村の図書館設置率は55.6%に対してオホーツク地域（網走支庁）は89.5%。'85年度には訓子府町で図書貸出率全国一を達成するなど、多くの市町村で置戸町に学び、追いつき追い越せという気風が育っていきます。多くが住民の声によって図書館開設に踏み切り、自動車図書館や貸出方式の検討、利用しやすい施設の工夫など、置戸町の経験を生かしながら、各市町村が独自の取り組みを始めるようになりました。また、'73年には北見地区公共図書館（室）連絡協議会、'75年には網走管内公共図書館協議会が発足し、情報交換や職員研修など、互いに学習し、交流



開放的な訓子府町の図書館。暗いイメージを払しょくしたと開館当時は話題になった

する連携が公的にも生まれていきます。

'80年代になって全国や道内で図書館情報ネットワーク構築が話題に上がるようになると、北見や網走地域の連携実態にも注目が集まるようになります。そして、'87年に北見市が郵政省のテレピア構想モデル都市に指定されたことで、事業の一環として図書館情報サービスシステムが組み込まれ、広域での図書館ネットワーク構築が取り上げられるようになります。同年、こうした動きの中から「北見地域図書館ネットワークシステム研究会」が発足。北見市・美幌町・端野町・訓子府町・置戸町・留辺蘂町・津別町・佐呂間町・遠軽町の1市8町（'90年に女満別町が参加して1市9町に。'05年の北見市・留辺蘂町・常呂町・端野町の市町村合併により現在は1市7町）が参加することになりました。研究会では、蔵書目録の共有化による相互貸借とレファレンス協力、国会・全道・大学・専門図書館とのネットワークに向けて研究会を開催し、その課題や方策を探りながらモデル実験や地域データベースの構築、電算化などシステムの整備が図られます。

現在は、その後のインターネットの普及に伴い、加盟市町の蔵書が一括して検索できる仕組みになっています。図書館同士の相互貸借はもちろん、図書館カードが共通利用できるのも、ドライブがてら隣まちの図書館で本を借りることも可能です。互いに刺激しあって図書館活動が行われてきた地域だけに、施設や蔵書もそれぞれ特徴があり、利用者にとっては選択の幅が広がるという大きな利点があります。

### ネットワークで北海道らしい図書館運営を

北見地域図書館ネットワーク研究会に加盟する図書館は、「自立した図書館運営」に重点を置いて活動を続けてきました。それだけに、利用者は高度で専門的な資料を要求することがあります。しかし、一方で、地方財政の厳しさや市町村合併問題、指定管理者制度

の導入など、地方自治体をめぐる環境は厳しさを増しています。研究会では、このような状況を踏まえ、'05年5月に「北見地域図書館がめざすもの」を取りまとめ、今後の方向性を確認しました。

「住民が必要とするであろう地域課題、生活課題に関する資料や娯乐的要素をもった資料、また教育資料や基本図書、レファレンス資料などが自らのまちの図書館に揃えられており、いつでも、誰もが利用できる環境を整備することが図書館第一の使命」としながらも、厳しい財政環境が想定される今後の方策として、「広域的な分担収集・分担保存も視野に入れながら今後も情報交換等を密にし」サービスの充実を図っていくことをうたっています。ネットワークに加盟していることで、自館にない本でも7割が管内での相互貸借で対応できるため、迅速さや物流コストなどのメリットがあります。また、蔵書の点でいえば、ネットワークに加入しているどこかの館が保管していれば除籍するなど、保存の面でも利点があります。古い雑誌などは、抜けている号があっても他館が保管していることで、通しでそろえられるなど、補完しあいながら共有していくことが可能です。木工関係は置戸町、温泉の本は北見市の留辺蘂など、これまでは、あうんの呼吸で各館が力を入れてきた資料収集もあるため、今後はこうした情報を交換しながら地域全体として蔵書構成を検討していくことも始めています。

'05年に市町村合併を経験した北見市内では、過去の連携があったことで、図書館運営に関しては大きな混乱もなく、スムーズに移行することができたといいます。北見市以外のネットワーク加盟7町の場合は、図書館間の相互貸借のため、利用者から直接予約を行うことができず、共通利用のカードで借りた場合も、その図書館に返却しなければなりません。北見市では北見・端野・常呂・留辺蘂の各自治区内の4つの図書館であれば、どこで借りてどこへでも返却が可能になっていま

す。今後は、この仕組みをネットワーク加盟の全市町でサービスできるよう、物流体制やコスト削減の検討も進んでいます。

『『これからの図書館像』のような、具体的な検討議論はまだありませんが、地域の住民に果たしてきた役割は理解されていると思います。貸出だけでなく、もっと違った側面でのサービスがあるのではないかとことは、われわれがみんなで考えなければいけない』と北見市立中央図書館の加藤孝館長。また、北見市立留辺蘂図書館の大林清司司書も「豊かな生活と産業を創出して、経済的なゆとりと誇りを持って暮らしていくために図書館がどのようにかかわっていくのか」ということは、難しいけれど取り組んでいかなければいけない大きな課題です」といいます。

ビジネス支援や行政支援など、先進例として情報発信されている図書館のように派手なパフォーマンスはありませんが、地道に課題に向き合い、一歩ずつ前進しているのが北見地域の図書館といえるでしょう。北海道は広域な上、市町村をサポートする道立図書館は道央に1館しかありません。こうした現状を踏まえると、地域内の図書館同士が連携して、その存在価値を高めていくことは、不可欠な視点といえるでしょう。置戸町、そしてそれを広げていった北見地域の経験は、北海道ならではの図書館運営のこれからの方向性を示しているのかもしれない。



ネットワーク研究会の事務局がある北見市立中央図書館